九州産業大学長
北島　己佐吉　殿

博士学位論文・作品の審査及び
最終試験・学力の結果確認報告

d-3

西暦　2021 年　7 月 15 日
審査委員会委員
職 名　芸術研究科　教授
氏 名　三枝　孝司

1．学　位

博 士 （ 芸 術 ）

2．氏　名

篠木　秀実

3．博士学位論文・作品の題目

コラージュ技法により視覚化された人生脚本の分析と修正についての研究

― コラージュ療法及び交流分析からの考察 ―

4．博士学位論文等の審査結果の要旨

博士の学位授与の評価基準を満たしているものと判断し、合格とする。

5．最終試験・学力の確認の結果報告

コラージュ作品から、心的なイメージを読み解き、交流分析の人生脚本理論を用い、クライアントが発達の各段階で、心的イメージを視覚化しており、それにより客観的な気づきを促し、さらに修正を図るための独自の心理療法の手法である、ＴＡ発達段階コラージュ療法について、その有効性を考察した研究は独自性があり興味深く、博士学位に値すると判断した。今後のさらなるコラージュ療法の研究に期待を込め、審査結果を合格とする

備考／審査委員ごとに作成すること

九州産業大学長
北島　己佐吉　殿

博士学位論文・作品の審査及び
最終試験・学力の結果確認報告

d-3

西暦　2021　年　7月　15日
審査委員会委員
職 名　教授
氏 名　井上 貴一

1．学　位

博 士 （ 芸 術 ）

2．氏　名

篠木 秀実

3．博士学位論文・作品の題目

コラージュ技法により視覚化された人生脚本の分析と修正に ついての研究
― コラージュ療法及び交流分析からの考察 ―

4．博士学位論文等の審査結果の要旨

博士の学位授与の評価基準を満たしているものと判断し、
合格とする。

5．最終試験・学力の確認の結果報告

本研究は、交流分析の基本的な理論に基づくもので、言葉を媒介とする従来のカウンセリング手法に加え、視覚や切り貼りする体感覚を伴うコラージュ作成とグループシェアリングを併用することにより、クライアントが自らの人生脚本の修正をより行いやすくなることを検証したものである。

論文では、独自の心理療法の手法である「TA(交流分析)発達段階コラージュ療法」について詳細な事例報告が行われており、心理療法の分野における芸術的手法の可能性を論じたものとして高く評価できる。博士学位に値すると判断し、審査結果を合格とする。

備考／審査委員ごとに作成すること

九州産業大学長
北島　己佐吉　殿

博士学位論文・作品の審査及び
最終試験・学力の結果確認報告

d-3

西暦　2021　年　7月　15日
審査委員会委員
職 名　国際文化研究科
臨床心理学研究分野　教授
氏 名　森川　友子

1．学　位

博 士 （ 芸 術 ）

2．氏　名

森川友子

3．博士学位論文・作品の題目

コラージュ技法により視覚化された人生脚本の分析と修正についての研究

― コラージュ療法及び交流分析からの考察 ―

4．博士学位論文等の審査結果の要旨

博士の学位授与の評価基準を満たしているものと判断し、合格とする

5．最終試験・学力の確認の結果報告

クライエントが交流分析でいうところの人生脚本の修正を行いやすくなる方法として、事前カウンセリングで気づきを賦活し、その後乳児期をはじめとした発達段階上の各時期をテーマにコラージュを作成、グループシェアリングで気づきの意識化を促すというプログラムの提案である。その研究には独自性があり効果も示されているため、合格と判断した。

備考／審査委員ごとに作成すること

九州産業大学長

北島　己佐吉 殿

博士学位論文・作品の審査及び
最終試験・学力の結果確認報告書

d-4

西暦　2021 年　7 月　15 日

審査委員会

主 査　職 名　芸術研究科　教授

氏 名　三枝　孝司　㊞

副 査　職 名　芸術研究科　教授

氏 名　井上　貢一　㊞

副 査　職 名　国際文化研究科
臨床心理学研究分野　教授

氏 名　森川　友子　㊞

1．学　位

博 士 （ 芸 術 ）

2．氏　名

篠木　秀実

3．博士学位論文・作品の題目

コラージュ技法により視覚化された人生脚本の分析と修正についての研究

― コラージュ療法及び交流分析からの考察 ―

4．博士学位論文等の審査結果の要旨

本委員会は本論文が博士（芸術）の学位を授与することに十分な内容であると評価する。

5．最終試験・学力の確認の結果報告（d－5参照）

九州産業大学長
北島　己佐吉　殿

博士学位論文・作品の審査及び
最終試験・学力の結果確認報告書
5．最終試験・学力の確認の結果報告

d-5

西暦　2021 年　7 月　15 日
審査委員会
主 査　職 名　芸術研究科　教授
氏 名　三枝　孝司

本研究は、交流分析の基本的な理論に基づくもので、言葉を媒介とする従来のカウンセリング手法に加え、視覚や切り貼りする体感覚を伴うコラージュ作成とグループシェアリングを併用することにより、被験者が自らの人生脚本の修正をより行いやすくなることを検証したものである。

研究者は交流分析の理論に基づき、退行催眠により人生脚本の修正を図る心理セラピーを、23 年間で累計 3,000 件以上行ってきた実績がある。交流分析の人生脚本理論では、人間は、人生の早期にどのように生き、どう死んでいくのかを、前意識レベルで決めているため、大人になっても、人間関係などで様々な問題が生じ、思い通りに生きられないとされている。コラージュ療法は、既存の素材を切り貼りするだけで手軽に制作できるコラージュ作品から、心的イメージを読み解き、心理状態の改善を図る芸術療法の一分野であり、退行催眠よりも侵襲性が低く適用範囲が広いため、治療的退行が起きる利点がある。被験者が発達の各段階で持っていた自分や他者に対する心的イメージをコラージュの制作により視覚化し、グループ・シェアリングで言語化することにより、自分の人生脚本の客観的な気づきを促し、さらに修正を図るための独自の心理療法の手法により、その有効性を検証・考察している。

論文では、独自の心理療法の手法である「TA(交流分析)発達段階コラージュ療法」について詳細な事例報告が行われており、心理療法の分野における芸術的手法の可能性を論じたものとして高く評価できる。また、公聴会において発表内容、質疑応答も的確に回答するなど、研究者としての能力も高く、博士学位に相応しいと判断し、審査委員会での審査結果、本論文の研究者は博士の学位を授与される十分な資格があるものと認められると判断した。